

宮古島市立教育研究所

# 所報

第5号 2011年3月発行

発行者 宮古島市立教育研究所  
所長 與儀 千寿子  
住所 宮古島市下地字上地472-39  
宮古島市下地庁舎3階  
電話 0980(76)6400 FAX(76)6154  
<http://www3.city.miyakojima.lg.jp/kenkyusyo/>



## ～学び合うことの大切さと教育研究所のあり方～

所長 與儀 千寿子

今年度は前期に中学校国語の長期研修員、後期に中学校生徒指導の長期研修員を受け入れて、教育研究所の研修が行われた。二人の教師に共通することであるが、自分自身の日頃の実践に対する「課題意識」が高いと言うことがまず特筆されよう。さらに、生徒理解の確かさ、研究調査に対する緻密さと深さ、集中力、粘り強さに、研究を支援する者として心強く感じたものである。

また、学校現場でも、県教育庁宮古教育事務所や宮古島市教育委員会の指導の下、様々な授業改善のプログラムが実践され、新学習指導要領の実施に向けて、校長先生をはじめ、多くの先生方の意欲的な取り組みが見られたことは、これからの宮古島の教育に大きな希望となるものである。

考えてみると、授業改善の充実は、教師の核であり、授業に対して専門職としての誇りと信念を持って自分の授業スタイルを創って行くことは教師に課せられた使命であろう。

新学習指導要領を拠り所として、「基礎・基本の定着」という不易の取り組みを確実に進めながら、新しい教育の流れにもアンテナを高くして実践していくひたむきさが需要である。本研究所としても、学び合う教師のために、常に、新しい情報を発信し、力になりたいと思う。子供たちの生き生きとした学びの場を創り出せるのは教師の情熱と弛まぬ努力にほかならない。「子供の興味・関心を高め、学ぶ力を引き出す授業づくり」のために、研究所としても研修の機会を増やし、少しでも教師の学びの支援をしたいと考える。

特に、23年度は新学習指導要領の「伝統的な言語文化と国語に関する事項」を受けて、「豊かな言語活動」や日本の伝統文化である「古典文学」等の取り扱いに関しても、より実践的な教材製作、教材分析、授業作りのための研修を進めたい。

また、小学校文学教材の「豊かな授業づくりのための、教材分析のあり方」について、深く研修する機会を作りたい。多忙さに流されて、指導書のみ頼りがちな教材分析と授業のあり方を総点検する必要があると考える。徹底した教材分析と

教材観を持つことで、子供の導き方や支援がより確かなものになると思う。授業が平板なものになってしまわないよう、同校、同学年、あるいは、志を同じくする仲間と互いに切磋琢磨する機会をつくり、定期的に学習し、授業に生かすことが重要である。互いに学び合う集団づくりが校内研修にとどまらず、多くの場所で出来ることを願っている。研究所として、そういう先生方の支援もしたいと思っている。

さて、宮古島市立教育研究所は開設5周年の節目を迎えることが出来た。昭和52年(1982年)旧市町村教育長会が県立教育センターの宮古分室設置を県に要請してから平成18年(2006年)4月の宮古島市立教育研究所開設までに実に24年の歳月を要した。そして、この5年間に、9期の研究教員を送り出した。彼等は現在、学校現場でリーダーとして学校経営の中核を担っている。

また、教育相談室や適応指導「まていだ教室」での不登校児童生徒の指導・支援など、児童生徒の自立支援に大きな役割を果たしている。特に、今年度は、教育相談室と「まていだ教室」との連携で、危険物取り扱いの資格取得試験合格や高校入試合格等、生徒の自立に向けて、職員の努力が実を結んだことも嬉しいことである。多くの課題を抱えながらも、学校現場と互いに補完し合いながら進みたいと思っている。

教育研究所の窓から見える与那覇湾の美しい眺望、このような静かな環境で学べることは素晴らしい事である。これからも各学校や専門機関、地域の方々と強い絆を結び合いながら宮古島市の「教育課題解決」に向けて、力を尽くしたい。

本研究所の開設にご尽力なされた、元宮古島市教育委員会教育長久貝勝盛氏は、開設に寄せて「いろいろ制約のあった長期研修が宮古でも存分に出来るようになった。離島苦が一つ解消されます。」と述べておられる。嘸みしめるべき言葉だと思う。

## 長期研修を振り返って



第8期研究員  
狩俣中学校 仲榎京子

宮古島市立教育研究所第8期研究生として、平成22年4月1日から9月30日までの6ヶ月間「話すこと・聞くこと」の力を育てる指導の工夫～目的や場面に応じた言語活動を通して～というテーマで半年間研究に取り組みました。生徒が人前で話すことが苦手という実態があり、その課題を少しでも解決したいという気持ちと私自身のこれまでの授業を振り返り、工夫改善を行いたいとの思いから取り組みました。研究期間中は、これらを解決するため多くの論文や

著書を読んだことで、授業改善のための方法やヒントを学び研究に生かすことができました。

研究を終えて、学校現場に戻り、教科の授業や生徒への対応、行事等と慌ただしく過ごす中で、自分の研究テーマを継続することにくじけそうになることもありましたが、しかし、「研究したことを生かしたい」という気持ちが支えとなり、日々の小さな積み重ねを大切に取り組むことで、生徒達の「話すこと・聞くこと」への自信につながりつつあることをうれしく感じています。

今回の研修を通して「学び続ける教師こそ、生徒を教え導くことができる」ことを実感することができました。私自身、これからも学び続け成長していける教師でありたいと思います。



第9期研究教員  
北中学校 狩俣 典昭

うろこ雲を天高くに見上げ、サシバの舞い降りる10月、教職21年目にして初の長期研修に、抱負を胸にしながら現場を離れる一抹の寂しさをもって、第9期研究教員としての研究をスタートさせました。

研究に先立ち実施した教職員対象（宮古地区小中学校）のアンケートでは、小学校、中学校共に7割以上の教職員がここ数年の生徒指導にやりづらさを感じており、本地区においても学区や学校規模によって多少の差異はあるものの、近年、全国的に問題視される生徒指導上の課題と同様に「児童生徒の規範意識の低下」「発達障害」「低学力」「保護者との共通理解や連携」「不登校生徒への対応」等、多様な課題が挙げられている。

本研究においては、その多様な生徒指導上の課題の中から、中学校において特に大きな課題となっている「あそび・非行」不登校傾向生徒の支援について取り上げ研究を進めてきました。

本研究の目標のひとつに地域の活用法の開拓を掲げましたが、「開かれた生徒指導」の視点

で地域（JCI）の大人社会と「あそび・非行」不登校傾向生徒の現状について課題を共有し、JCIや各事業所と共に「JT-Plan」を企画、推進できたことは大きな成果となりました。

「人とのふれ合い」における相互作用の中で生徒自身が自らについて立ち止まって考え、「自分のやりたいことは何か」「やらなければならないことは何か」葛藤の中での「気づき」を「JT-Plan」を通して与えることができたと考えます。

「宮古の子は宮古の手で育てる。」Planの「事後アンケート」に記載された中学校長の言葉ですが、家庭はもちろん、学校、行政、地域の大人が一体となってこそ、子ども達へ「気づき」を与え成長を促すことができることを本研究を通して確信しました。

末筆になりますが、「JT-Plan」の企画、推進等、多大なご協力を頂いたJCIの中尾忠裕理事長をはじめ、各事業所の皆様、そして、平良中、久松中、北中の校長先生をはじめ諸先生方に感謝の意を表しお礼を申し上げます。

今後の教職においても研究心を忘れず「宮古の子ども達の教育」のため、思いをもって頑張っていきます。

## 「まていだ教室」より

窓から見下ろすと、パノラマのような風景が広がる。目の前は、まるで湖のような与那覇湾、遠くで聞こえる鳥の鳴き声。静かな空間が漂う「まていだ教室」から眺める風景である。そこにはなぜか、いつものにぎやかな学校とは違った空間と時間が自然に音もなく流れていき、穏やかな気持ちになれる。そんな恵まれた環境にある「まていだ教室」へ来室してくる子どもたちも、この空間は安心して過ごすことができるようだ。

何らかの原因をきっかけに、ある日を境に、学校から少しずつ離れてしまった。友達の中に、クラスの中に入りきれなくなってしまう。心の奥底に、はかりしれない重い荷物を抱え込んで、それもやっとの思いで親に連れられて、重い足を運んで来る・・・そんな不登校という問題を抱えた子どもたちとの出会いは、想像以上のものだった。

まず、私たちがとまどったのは子どもたちとの接し方である。これまでは何の屈託もなく明るく元気な子どもたちとの関わりしか経験がなかった。ここに来る子どもたちの何気ない言葉かけにも正直とまどいを感じた。ずっとうつむいて決して顔をあげない子、車から降りられない子、どんなに話しかけても言葉を返すことの

できない子、まったく話せない子、一日一日、天気のように態度が変わる子、想像していたより厳しい現実だった。

一番大切な事として、相手を理解することから始まり、一人一人を受けとめ、心から寄り添い、安心して過ごせるような居場所づくりから心がけた。そして、指導員同士で常に話し合い、協力しながら、個々に合わせたよりよい支援を試行錯誤で進めてきた。

日々子どもたちを支援していく中、時折見せる笑顔やほっとした表情、うつむいていた顔をしっかりと見せてくれた瞬間、聞き取れないが確かに聞こえた小声・・・本人にとっては気がつかない、何気ないささいな事かもしれないが、その子自身のわずかな変化にも私たちは大きな喜びを感じることができた。

この一年間での「まていだ教室」の子どもたちと関わりは、多くの事を学ぶ貴重な経験となった。まわりの支えてくれた多くの方達にも感謝したい。これからも学んできたこと、経験してきたことを生かし、子どもたちの支援者として教育に携わっていきたい。

指導教諭 亀川典子  
指導員 前川尚代  
指導員 砂川さつき

## 教育相談室

～ 一年間の支援を通して思うこと ～

新人ばかりでスタートした相談室。

何を、どのように始めたらよいか、話し合いを重ねながらの日々。

市内の小・中学校への巡回訪問を終えると、学校や関係機関から次々と支援の依頼があった。相談業務が主な仕事と思っていたが、来室した児童生徒には学習支援等で終日を過ごした。

しかし、来室理由が不登校・登校しぶり・勉強についていけない等多種多様な生徒の来室は来室時間が重なり課題も出てきた。

人見知りが激しく、コミュニケーションの苦手な生徒が、相談室での同世代との出会いが効を奏し、見違える程の変化を見せた。反面、時間を気にせず来室できる等を知ったことで、怠学に移行しているのではと憂う生徒も見られ、相談室への誘いを自問自答することもあった。

今年度の相談室は、本来の相談室の仕事内容からはやや逸れていると思われる学習支援や資格取得の勉強が目立った。しかし、学校の教科の勉強には興味を示さなかった生徒が、資格取

得の勉強に関心を持って取り組み、それを通して、数学・国語・物理・科学などの教科学習へと発展できたのは効果的だった。

自らの挑戦が実を結び、達成感や成就感を味わった彼らは徐々に変化し、さらに彼らの変化が家族を変化させていく様を見ると、学校現場の求めにマッチした支援が出来たんだと安堵する。

22年度の来室者は多くが中学生だった。しかし、3年生には後がないだけに送り出すことに無念さが残る。

特別支援教育が制度化され、居場所づくりが色々な形で試みられているが、義務教育を終えた後を引き継ぐ一貫した支援体制はまだ整っていない。

願わくば、この宮古島市にせめて高校まで支援できる組織が早期に構築されることを期待して止まない。

教育相談員 濱元誠喜 狩俣芳子  
立津和代 宮平幸子

## 研修事業

多くの方が研修会に積極的に参加して頂き、有意義な研修会を実施することができました。また研究・研修会の講師をして頂いた先生方には、心から感謝いたします。

今後も学校現場のニーズにあった研修を企画していきたいと思っております。

### 研究教員の研修（入所研修）

2人の研究教員が6ヶ月間の研究を行い、多くの成果を上げた。検証授業（公開）や研究成果報告会を通し、研究の成果を多くの教職員と共有し合い、指導改善へ役立てることもできた。

#### ○第8期（H22. 4. 1～9. 30）

仲榎京子（狩俣中学校）～国語～

研究テーマ：「話すこと・聞くこと」の力を育てる指導の工夫～目的や場面に応じた言語活動を通して～

#### ○第9期（H22. 10. 1～H23. 3. 31）

狩俣典昭（北中学校）～生徒指導～

研究テーマ：地域・関係機関と連携した「あそび・非行」不登校傾向生徒の支援のあり方～開発的生徒指導の視点での支援の工夫～



検証授業（7月）



成果報告会（3月）

### 夏期実技講座

#### ■ホームページ作成講座A・B

（8/2～3 南小）

下地忠夫教諭（砂川小）を講師に実施。2日間で、38の方が受講した。

##### 【内容】

##### ◇講座A（8/2）

- ・様々なWebページ作成の方法紹介
- ・HP作成ソフトによる作成演習

##### ◇講座B（8/3）

- ・ブログ開設の手順
- ・更新の仕方



#### ■「予防的・開発的教育相談」の工夫

（8/13 中央公民館）

県立総合センターの功刀弘之指導主事による出前講座を実施。参加者（38人）は、講義と演習を通して教育相談の技法を楽しく学んだ。

##### 【内容】

- ・講義「これからの生徒指導のあり方」
- ・演習「自己肯定感・社会的スキルを育むワーク・演習」

- スキル：エンカウンター、アサーショントレーニング等



#### ■感想文・感想画実技研修

（8/17 下地庁舎）

平良ヒロ子久松中校長、與儀千寿子研究所長を講師に、1冊の本をもとにして感想文の指導法と感想画の技法について学んだ。



#### 琉球大学教育学部との連携事業

##### ■上野小校内研修会に講師招聘

（12/10 上野小）

上野小学校の授業研究会（算数）に小田切忠人教授（琉球大附属小学校長）を講師として招聘し、有意義な研究会を実施できた。

##### ◆平成23年度も招聘事業

が実施されます。招聘したい学校は、本研究所に問い合わせ下さい。

